令和元(2019)年度　文部科学省委託事業

日韓高校生交流事業
事業報告書

独立行政法人　国立青少年教育振興機構

目　次

事業概要 …… 1

＜派遣事業報告＞

1．参加者名簿 …… 3
2．日　程 …… 5
3．ダイジェスト …… 6
4．学習成果発表会 …… 10
5．事業後の成果発表 …… 13
6．参加者アンケート …… 15
7．成果と課題 …… 16

＜受入事業報告＞

1．参加者名簿 …… 21
2．日　程 …… 23
3．ダイジェスト …… 24
4．学習成果発表会 …… 27
5．成果と課題 …… 28

事業概要

１．事業趣旨

日本と韓国の高校生の相互交流を通して、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

２．実施関係機関

（１）主催

日本：文部科学省

韓国：国立国際教育院

（２）実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

韓国：徳成女子大学

３．参加人数

日本：５３名、引率者５名

韓国：５４名、引率者６名

４．日程

（１）派遣

引率者研修	９月２０日（金）～　９月２１日（土）	２日間
事前研修	１０月２７日（日）～１０月２８日（月）	２日間
派遣	１０月２８日（月）～１１月　１日（金）	５日間

（２）受入

日本受入	９月１７日（火）～　９月２１日（土）	５日間

派 遣 事 業 報 告

１．参加者名簿

１）参加者名簿

	氏名	学校	地域
1	螺良　準哉	北海道札幌東陵高等学校	北海道
2	石綿　那奈	岩手県立花巻南高等学校	岩手県
3	吉水　真理奈	岩手県立不来方高等学校	岩手県
4	茂木　萌	仙台育英学園高等学校	宮城県
5	岡田　雅由奈	山形県立天童高等学校	山形県
6	瀬谷　梨音	福島県立あさか開成高等学校	福島県
7	川村　千尋	茨城県立中央高等学校	茨城県
8	柿沼　礼奈	群馬県立伊勢崎高等学校	群馬県
9	白根　向日葵	埼玉県立南稜高等学校	埼玉県
10	田中　美羽	埼玉県立春日部女子高等学校	埼玉県
11	中陣　春菜	埼玉県立春日部女子高等学校	埼玉県
12	早川　芽	千葉県立松戸国際高等学校	千葉県
13	木田　朱莉	東京都立桜修館中等教育学校	東京都
14	小池　花	東京都立青梅総合高等学校	東京都
15	佐々木　みゆ	東京都立松が谷高等学校	東京都
16	古山　杏春	東京都立松が谷高等学校	東京都
17	荒清　執人	富山県立伏木高等学校	富山県
18	加藤　真央	山梨県立甲府城西高等学校	山梨県
19	師田　菫	長野県上田染谷丘高等学校	長野県
20	山田　珠羽	岐阜県立土岐紅陵高等学校	岐阜県
21	中村　彩乃	愛知県立千種高等学校	愛知県
22	平澤　美凪	愛知県立知多翔洋高等学校	愛知県
23	西口　弥穂	滋賀県立国際情報高等学校	滋賀県
24	山﨑　萌珠	ヴォーリズ学園近江兄弟社高等学校	滋賀県
25	杉村　詩織	京都府立鳥羽高等学校	京都府
26	八木　琴子	京都府立鳥羽高等学校	京都府
27	合澤　月雪	大阪府立花園高等学校	大阪府
28	安見　日菜子	大阪府立千里高等学校	大阪府
29	吉川　綾	大阪府立成城高等学校	大阪府
30	河合　乙葉	大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学校	大阪府
31	藤本　らな	大阪市立工芸高等学校	大阪府
32	倉橋　梨於	兵庫県立須磨友が丘高等学校	兵庫県
33	高野　舞	兵庫県立神戸甲北高等学校	兵庫県
34	山本　莉奈	兵庫県立西宮今津高等学校	兵庫県
35	富増　美有	神戸市立六甲アイランド高等学校	兵庫県
36	北村　莉子	奈良県立高取国際高等学校	奈良県

	氏名	学校	地域
37	枚本　里緒菜	奈良県立高取国際高等学校	奈良県
38	岸本　夕夏	和歌山県立和歌山高等学校	和歌山県
39	片松　宥乃	広島市立舟入高等学校	広島県
40	上代　雛子	島根県立松江商業高等学校	島根県
41	川口　寧々	岡山市立岡山後楽館高等学校	岡山県
42	北島　佳奈	福岡県立ありあけ新世高等学校	福岡県
43	青木　鈴華	佐賀県立唐津青翔高等学校	佐賀県
44	大瀬良　凜	長崎県立佐世保商業高等学校	長崎県
45	西林　愛海	長崎県立対馬高等学校	長崎県
46	緒方　朱梨	熊本県立東稜高等学校	熊本県
47	髙橋　来翠	大分県立由布高等学校	大分県
48	中村　小夏	大分県立佐伯豊南高等学校	大分県
49	松村　美空	鹿児島県立開陽高等学校	鹿児島県
50	上地　さくら	沖縄県立名護高等学校	沖縄県
51	上間　まき	沖縄県立本部高等学校	沖縄県
52	志良堂　照子	沖縄県立陽明高等学校	沖縄県
53	平良　柊翔	沖縄県立陽明高等学校	沖縄県

２）引率者名簿

	氏名	所属	役職
団長	大向　満	国立夜須高原青少年自然の家	次長
引率	野田　恭子	国立大隅青少年自然の家	企画指導専門職
引率	北平　明美	国立乗鞍青少年交流の家	企画指導専門職
引率	國定　奈央子	国立青少年教育振興機構 総務企画部　総務企画課	係員
引率	須崎　情惠	国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金部　国際・企画課	係員

２．日程

	日付	場所	時間	プログラム
1	10 月 27 日 （日）	日本（東京）	午後	集合 アイスブレイク、チームミーティング 韓国語講座
2	10 月 28 日 （月）	ソウル	午前 午後	金浦空港到着 国立ハングル博物館「ハングル文化と韓国語」 特別講義：生活韓国語　SURVIVAL KOREAN
3	10 月 29 日 （火）	ソウル	午前 午後	高校訪問発表準備 歓迎昼食会 見学：ソウル市内（班別行動） 公演観覧「NANTA」
4	10 月 30 日 （水）	ソウル	終日 夜	①訪問：ドソン高等学校 ②訪問：チンジョプ高等学校 訪問：徳成女子大学　鍾路キャンパス 　特別講演：日韓の異文化コミュニケーション
5	10 月 31 日 （木）	ソウル	午前 午後 夜	訪問：在大韓民国日本国大使館　公報文化院 訪問：景福宮（韓服体験） 訪問：徳成女子大学（キャンパス見学） 学習成果発表会 歓送交流会
6	11 月 1 日 （金）	ソウル	午前	金浦空港発

３．ダイジェスト

＜１０月２７日（日）＞

○事前研修

日本各地からオリンピックセンターに集合し、事前研修を行った。初めて会った仲間たちと簡単なレクリエーションを通して、アイスブレイクを行った。その後、関東国際高等学校副校長の黒澤先生の韓国語講座を受け、簡単な日常会話を学んだ。

＜１０月２８日（月）＞

○訪問「国立ハングル博物館」

ハングルを使用するまでの歴史的流れについて学んだ。ハングルを使用することで、より多くの人に情報が伝わり、社会的・文化的に大きな変化をもたらしたこと、ハングル文字が韓国国民のアイデンティティであることなど、ハングルの歴史から韓国の国民性について、幅広く学ぶことができた。

○特別講演「生活韓国語　ＳＵＲＶＩＶＡＬ　ＫＯＲＥＡＮ」

日常会話で使用する頻度の高い韓国語を学んだ。講義の途中では、講師が参加者に韓国語での質問を行うなど、参加者は緊張した様子ではあったが、韓国語で回答していた。さらには、韓国語の詳細な発音の違いなども講義の中で取り上げられており、初日から韓国語を学ぶ良い機会となった。

＜１０月２９日（火）＞

○歓迎式「韓国国立国際教育院」

韓国国立国際教育院で歓迎を受けた。本研修の日程や訪問先の説明などがあった。

○観覧「ＮＡＮＴＡ公演」

韓国の舞台芸術作品である「ＮＡＮＴＡ」の鑑賞を行った。厨房が舞台となっており、厨房で使用する様々な道具を用いての演奏や歌は圧巻であった。海外でも公演されており、非常に興味深い内容であった。

＜１０月３０日（水）＞

○訪問「１団：ドソン高校」

ドソン高校では、体育、英語、音楽、美術の授業体験を行った。体育の授業では、ドッヂボールを行い、白熱したゲームとなった。英語の授業では、日韓でペアとなり、お互いを紹介するなどを行った。また、「Ｋ－ＰＯＰ文化の発展について」をテーマにディスカッションを行い、Ｋ－ＰＯＰの好きなところや改善すべき点について意見交換を行った。

○訪問「２団：チンジョプ高校」

チンジョプ高校では、チェギチェギ（茶色い壺に向かって棒を投げる）という伝統的な遊び、Ｋ－ＰＯＰダンス、チマチョゴリの装飾品作り、お菓子作りなどを体験した。また、「未来志向的なパートナーとして隣国を知る」をテーマにディスカッションを行い、お互いの国や日本の祭りなどについて意見交換を行った。

○特別講演「日韓の異文化コミュニケーション」

講師：徳成女子大学　Ｒｏ．Ｊｕｈｙｏｕｎ　氏

日韓の文化の違いについて講義があった。文化は子供の頃から両親、学校、社会など育つ環境によって意識的・無意識的に教えられるものであり、両国にも様々な異なる文化があることを学んだ。さらには、韓国での礼儀などについても詳細な説明があり、参加者にとって韓国の文化を学ぶ良い機会となった。

＜１０月３１日（木）＞

○見学「雲峴宮」

「雲峴宮」は、朝鮮時代の歴史的建造物であり、当時は盛んな議論が交わされる革新政治の中心地でもあった。また、2016 年に韓国でヒットしたドラマの撮影地でもあることから、歴史的な学びと現代の韓国の文化を感じる場所であった。

○見学「在大韓民国日本国大使館　公報文化院」

説明者：一等書記官　小原　大介　氏

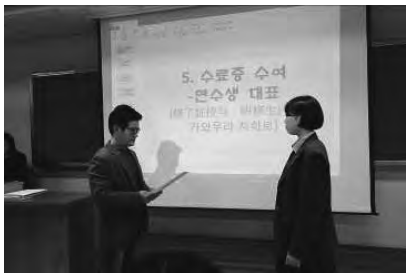
在大韓民国日本国大使館に訪問し、外交官として勤務されている小原氏の職務について、説明を受けた。

○体験「韓服体験（景福宮）」

韓服体験を行うとともに、朝鮮時代の正宮である景福宮の散策を行った。

○学習成果発表会

これまでの韓国研修を通して学んだことを班内で共有し、事前に選定したテーマに沿って、発表を行った。



４．学習成果発表会

１）１班：川村　千尋、平良　柊翔、高野　舞、髙橋　来翠、藤本　らな、
　　八木　琴子、山﨑　萌珠

①テーマ

・日韓アイドルの違い（食文化）

②相違点

・韓国は車優先である（赤信号でも歩行者がいなければ右折できる）。
・韓国は名前に名字が少ない。
・韓国は年齢が生まれた日から１歳となる。

③共通点

・うま味文化がある。
・芸能界に憧れとなるアイドルが存在しているアイドル文化がある。

２）２班：岡田　雅由奈、加藤　真央、上代　雛子、枚本　里緒菜、中村　小夏、
　　早川　芽、茂木　萌

①テーマ

・美容、食文化

②相違点

・韓国は高校生でも食堂で給食を食べなければならない。
・韓国はコスメショップが多く存在している。
・韓国の学生は、英語の授業でのスピーチ力が高い。
・韓国の学生は、パソコンのスキルも高い。

３）３班：大瀬良　凛、螺良　準也、富増　美有、松村　美空、安見　日菜子、
　　吉水　真理奈

①テーマ

・日本と韓国の高校生の違い

②相違点

・韓国では部活をしている人が少ない。
・韓国では部活動の頻度は週１回や月１回と少ない。
・韓国には、他の生徒の悩み相談を受けるフレンズコンサルテーション部という部活動がある。
・韓国の学校は座学が少なく、実践の機会が多い。

4）４班：会澤　月雪、荒清　執人、上地　さくら、木田　朱莉、白根　向日葵、
西林　愛海、平澤　美凪

①テーマ

・韓国の食文化

②相違点

・韓国は干支に猪ではなく豚年がある。
・韓国では食事の際、茶碗を持たずに食べる。
・韓国はステンレス製の箸とスプーンを使う。
・韓国は車が右側通行である。

③共通点

・主食が米である。
・箸を使用する。
・学校に制服がある。
・四季がある。

5）５班：柿沼　礼奈、片松　宥乃、北村　莉子、中陣　春奈、古山　杏春、山本　莉奈

①テーマ

・食文化

②相違点

・韓国では食事の際に必ず箸とスプーンを使用する。
・韓国は年長者から食べる。
・韓国では食器を持ち上げて食べることは行儀が悪いこととみなされる。
・韓国では米とおかずを混ぜて食べる。

6）６班：岸本　夕夏、北島　佳奈、瀬谷　梨音、中村　彩乃、西口　弥穂、
師田　菫、山田　珠羽

①テーマ

・暮らしの違い

②相違点

・韓国人は歩くのが早い。
・韓国には湯船がない。
・韓国では給食を残す人が多い。
・日本人は失敗を恐れて話さないが、韓国人は失敗を恐れず話してくれる。

7）7班：青木　鈴華、緒方　朱梨、川口　寧々、佐々木　みゆ、志良堂　照子、吉川　綾

①テーマ

・韓国の食文化

②相違点

・食器を持って食べない。
・箸、スプーンがステンレスである。
・トマトはフルーツになる。
・おかずと混ぜるご飯が多い。
・お酒はグラスが空になってから注ぐ。
・食事を残すのが当たり前である。
・１人で食事をしない。
・多くの種類の前菜がある。

③共通点

・韓国では、年長者が箸をつけるまで食事をしないという習慣があるが、日本にも全員が食卓につくまで食事をしないという習慣があり、年長者を立てるという意味では似ている。

8）8班：石綿　那奈、上間　まき、河合　乙葉、倉橋　梨於、小池　花、杉村　詩織、田中　美羽

①テーマ

・日常生活の違い

②相違点

・韓国は夫婦別姓である。
・韓国は湯船を使用しない。
・韓国は右側通行である。
・韓国は年齢が生まれた日から１歳である。
・韓国ではダンスの授業の際、体操服が自由であった。

５．事業後の成果発表

１）韓国研修を通して、学んだこと

①言語について

・他の参加者の韓国語のレベルが高く驚くとともに少し自信をなくしたが、自分自身への刺激となり、今後も頑張ろうと思った。また、他の参加者が韓国語をどのように勉強しているかを知る機会ともなり、勉強法について参考になった。

・違う国の人たちとコミュニケーションを取ることで、自分の視野も広がり語学能力も向上すると感じた。

・日本各地の韓国語を勉強する学生（日本団）と出会い、韓国語学習に対するモチベーションが高まった。また、一人でも多くの人に外国語に対する興味を持ってほしいと思った。

・韓国語に対する興味がより深まっただけではなく、初めて出会った仲間たちと研修を進めていく中で、コミュニケーション力の大切さを学んだ。今後も、様々なことに挑戦していきたい。

・今回の交流は、自分の目で見て、韓国を感じることができたが、自分の気持ちをうまく言葉で表現することができないもどかしさを痛感した。今以上に語学能力を向上させることで、一人でも多くの人に韓国の良さを伝えられるようになりたい。

②人や文化について

・出会いは素晴らしいと思う。事業に参加したからこそ素晴らしい出会い、素晴らしい経験があった。日常にあるひとつひとつの出会いを大切にし、仲間・親・支えてくれる人たちに感謝したいと思う。

・日常では知ることの出来ない韓国人の生活や文化を学ぶことができ、韓国の学校の授業風景や人の温かさ、日本に対する興味などを実際に体験することができた。

・研修に参加した当初は不安だったが、班のメンバーや韓国でサポートしてくれた大学生のオンニとの交流を通して、韓国語や韓国の文化を学ぶ良い機会となった。今後は、今以上に韓国語の勉強を頑張りたいと思っている。この研修に一人で参加しようと決意した自分にも、最後までやりきった自分にも誇りを持ちたい。

・この事業に参加したことでたくさんの方と出会い、つながりができた。自分の夢を見つけることにもつながった。

・自分で体験したことから、正しいことを判断する。それを信じることが重要だと感じた。

・日韓の違いで感じたことは、積極性である。韓国では、日本のような厳しい校則は無く、授業でもスマホなどを多く活用している。学生たちは、授業を嫌々受けるのではなく、自分から多くの意見を出し、意欲を持って授業に臨んでいる様子であった。日本でも学ぶべき姿勢であると感じた。

・自分の現在を知るとともに、未来への可能性を広げられたのではないのかと考えている。将来、韓国語に携わる職に就きたいと考えており、この研修で学んだことを生かし無駄にすることのないようこれからも勉強に励みたいと思う。

・今回の研修を通して、お互いの文化を理解し合い、尊重することの大切さを学んだ。

・韓国人は行動が早く、とても温かく、優しく頼りになる人ばかりであった。自分自身も失敗することや恥ずかしがらず、積極的に人のために行動できるようになりたいと感じた。

③日本と韓国について

・日韓両国の若者達がさらに交流を深め、これからの未来が明るくなってほしいと思った。

・日韓関係は私達の手で良くしていけると思った。少しの勇気で沢山の人と交流できる。また、学んだ韓国語を試す良い機会となった。現地の人と実際に会話する事で自分のさらなる語学力の向上に繋がる。研修終了時には自分の成長が実感できた。

・韓国での研修を通して、様々な体験からさらに韓国を知ること、さらに韓国を好きになることにつながることからも、自分で行動して、自分で体感することが大切であると感じた。

・習慣や文化など、自分の軸を中心に考えるのではなく、様々な考え方や文化・習慣があることをまずは知ることが大事だと感じた。他言語を学ぶことで、相手の国について、現地の人から直接話を聞くことが可能となる。これからも韓国語の勉強を頑張り、日本と韓国が今以上により良い活動をするための架け橋になりたいと考えている。

・韓国では、日本と韓国の距離を感じることはなかった。政治面の隔たりが原因で隣国である日本と韓国の文化的交流が失われることは非常に残念であると感じた。

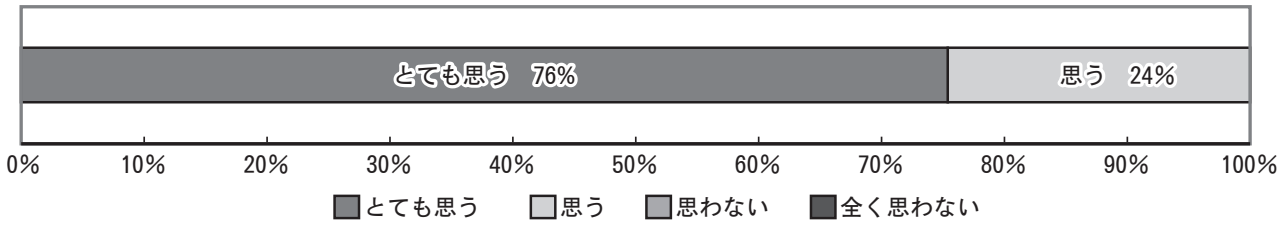
・日韓関係が悪くなっている中で、韓国に渡航することに少し不安もあったが、現地の人は優しく、実際に行き、体験することが大事だと感じた。

・日本と韓国の関係が悪化していく一方であるが、高校生でもできるＳＮＳでの発信や韓国旅行などを通じて、日韓関係を良い方向に変えたいと感じた。

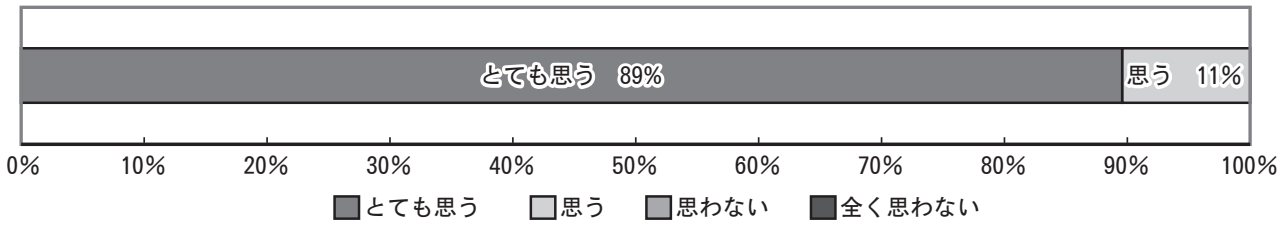
６．参加者アンケート

（１）アンケート集計結果

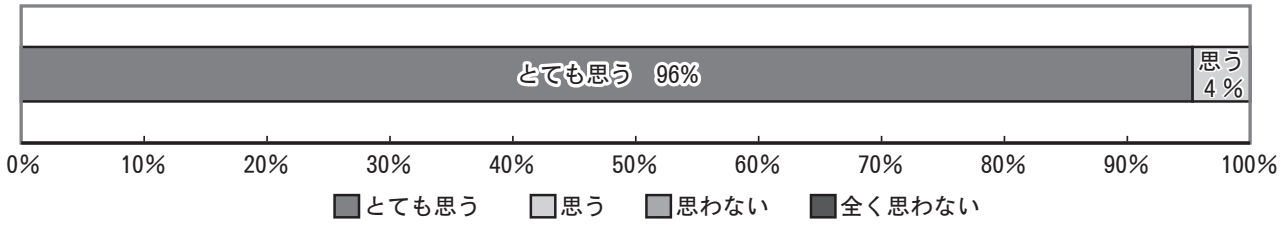
①日本人として世界に貢献したい。



②外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたい。

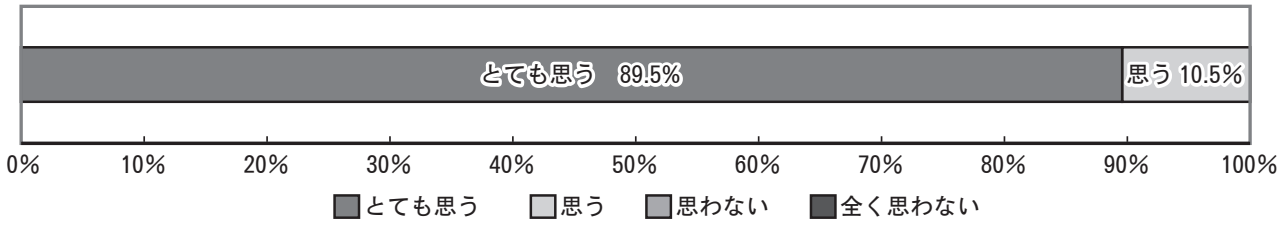


③交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたい。



（２）結果の分析

〇外向き志向



【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目３項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか？」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか？」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか？」のアンケート結果を集計したものである。国立青少年教育振興機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が 80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

７．成果と課題

１）団長　大向　満（国立夜須高原青少年自然の家　次長）

①はじめに

令和元年度「日韓高校生交流事業」は、日本と韓国の高校生の相互交流を通して、高い国際感覚を備えた青少年を育成することを目的として実施したが、韓国国立国際教育院（NIIED)、徳成女子大学をはじめ、多くの関係機関、関係団体にご支援をいただき、日本全国から集まった53名の参加者が、有意義に研修の中で、大きな成果をあげ無事に全日程を終了することができた。

今回の事業は､日本と韓国の関係が連日報道されているなかでの実施であったため、参加者、スタッフとも言葉には出さないが不安を抱えてのスタートとなった。そんな中で、今回の訪韓が単なる観光で終わらないために、参加者には汎用ではあるが「日本と韓国の違い」について調べるという課題を与え、十分に調査し、学習した上でこの事業に参加した。

②成果と課題

「K-POP」を国策とするだけあって、私たちは研修期間中効果的にK-POPが活用される場面を体験することがあった。NIIEDでの集合時には、K-POPスターの映像が大画面に映し出されることにより学生たちが素早く集まり､歓迎式では韓国童謡｢サメ家族」の映像に合わせてリズミカルにみんなで踊ることにより親近感が深まった。また、高校訪問時における韓国学生による音楽・ダンス発表など、K-POP をきっかけとして韓国への理解を深めてもらう取り組みに、日本の高校生たちは当然のように大いに興味関心を示し自然と輪の中に溶け込むことができた。

徳成女子大学のイム・ヒョナ先生から韓国語の基本的な会話を学ぶ楽しい時間が提供され、参加者に積極的に韓国語を使うことを促していただいた。グループ別のソウル市内観光、地下鉄体験、NANTA 公演を観覧し、年齢の近い大学生とバディを組み、共に自由食を体験。大学生のバディには韓国の学生と日本からの留学生が含まれており、日本の高校生がなじみやすいように配慮されていて、高校生たちも気軽に話しかけることができた。

また、韓国ドラマ「トッケビ」のロケ地訪問、韓服を着て宮殿（景福宮）見物などを行い、大いに韓国の歴史や芸術に触れることができた。インサ洞での夕食の後、徳成女子大学生涯教育院のノ・ジュヒョン先生から「日韓異文化コミュニケーション」と題して、日本の文化と韓国の文化の違いについて特別講義があった。日本での居住経験を踏まえ、韓国と日本の文化（文化とは見える文化と見えない文化の融合）の違いについて享受し、韓国の礼儀や食文化等について教わることができた。

今回の大きな柱の一つに韓国の高校訪問があった。今回の事業では二つのグループに分かれ、ドソン高校とチンジョブ高校を訪問し学生同士の交流が行われた。私が引率したドソン高校は、創立３年目のソウル市内にある公立高校である。最初の印象から明るく活気に満ちた自由な校風が感じられた。意外にも本気のドッジボールで日韓の高校生が打ち解け合い、英語、音楽、美術に分かれての授業体験。日本の子どもたちも精一杯の韓国語に英語を交えてコミュニケーションをとっていた。

その後､「K-POP 文化の発展について」をテーマにグループ自由討論を行った。お別

れ会では韓国高校生のダンス、バンド披露。日本では考えられない本格的なパフォーマンスに驚愕した。日本側からも二人の高校生がダンスを披露し、韓国の高校生に負けず劣らずのパフォーマンスで返したのには会場の全員が驚き拍手喝采が起きた。今回の研修に参加した日本の高校生の意気込みを感じた一瞬でもあった。今回の高校訪問で刺激を受けた一つに、ドソン高校では、生徒会役員の３名の学生が、ネイティブな日本語に日本人顔負けの丁寧な言葉で案内役をかってくれたことである。日本語に興味があるとはいえ、語学力の高さに驚かされたものである。

今回は様々な理由があったのだろうと思うが、ソウル市内に限定した行程となり、当初予定されていた DMZ（非武装地帯）などを訪問することができなかったのは少々残念であった。そして、日本大使館で書記官と質疑応答する場面もあったが、北朝鮮の問題や日韓関係についての話題が上がらなかったのは、高校生たちが大人の対応を示してくれたのであろうと思う反面、将来日韓の橋渡しをしたいという学生もいた中で、正直残念に思えた部分でもあった。

また、短期間に様々なプログラムが盛り込まれた内容であったため、バスでの移動中に車窓を楽しむなどの余裕が見られなかった。それぞれの場面を精一杯体験していた証であるが、欲をいえばもう少し時間に余裕があれば良かったと思う。特に、成果発表会の準備や発表に費やす時間も極力短縮せざるを得なくなり、高校生の声をしっかりと受け止めることが研修中に十分にできなかった。参加者それぞれが地域に戻りこの経験を情報発信し、これからの自らの進路の糧にしてくれることを願うばかりである。

③おわりに

「はじめに」の段でも示したが、令和元年「日韓高校生交流事業」は、日本と韓国の関係悪化が連日報道され韓国内では抗議デモや日本製品の不買運動がおきているなかで実施された。

今回、団長として高校生を韓国に引率するという貴重な機会をいただいたことにたいへん感謝すると同時に、私自身は正直不安があった。私以上に参加者や送り出す保護者も無事に実施されることに不安を抱いていることを考慮し、事前の電話連絡では安全に十分配慮し事業を行うことを伝えるとともに、スタッフの間でも不安を顔に出さず全員を無事に帰国させることを第一の目標と考えた。金浦空港を出発し、羽田空港で参加者を見送った際に、無事に全日程を終了し、全員を連れて帰ることができたことにスタッフ一同心から安堵したものである。

当初心配していた日韓関係の悪化による影響を見たり聞いたり感じることはなく、参加者が安全に事業を行えるよう企画運営してくれた徳成女子大学のイ・ギョンソン先生、イム・ヒョナ先生、学生の班リーダーの皆様及び通訳していただいたアンさん、チュさんに心からお礼申し上げたい。

隣国「韓国」の活力を肌で感じ、様々なプログラムを体験したことにより、日本から参加した高校生にはすばらしい刺激になったことであろう。いろいろと騒がれることの多い日本と韓国ではあるが、このような時代にこそ若い世代の交流の場である「日韓高校生交流事業」は必要であり、この事業が実施される限り、両国関係の未来は明るいと確信した４泊５日であった。

２）リーダー　北平　明美（国立乗鞍青少年交流の家　　企画指導専門職）

「百聞は一見にしかず」

「韓国へ行く」というと、「大丈夫なの？」と何人かの人に声をかけられた。

日本の参加者の中にもニュース等を見て多少の不安はあったと思うが、集合当日、「韓国が好き」という気持ちで集まった参加者の表情には、緊張はあるものの、交流事業に対する期待が満ち溢れていた。

そして、わずかに胸の奥にあった不安も、韓国に到着して受け入れスタッフや大学生の笑顔に迎え入れられた瞬間に完全に消え去り、最終日には別れに涙するほど、人の温かさに触れて過ごせた５日間となった。

プログラムの中で、韓国の歴史や文化、現在の生活、自分達と同じ高校生の学校生活に触れ、日本と比べながら、たくさんの共通点や相違点を発見することができた。飛行機で２時間ほどの“近くて遠い国「韓国」”。それでも出会った人達からは「人と人の『近さ』」を感じ、もっともっとお互いのことを学び、「つながりを大切にしたい」という気持ちを強くもつことができた。今回の高校生交流のように、お互いを尊重し理解し合って、人と人が繋がることが、国と国の距離を近づけるための核となるのではないだろうか。

今回参加した高校生が、自分自身の目で見て知り、感じたこと、学び得たことは大きな財産であろう。この経験を機に、両国の距離をもっと近づけてくれることを願っている。

３）リーダー　野田　恭子（国立大隅青少年自然の家　企画指導専門職）

「この経験を糧に、さらに！」

この事業を通して最も印象深かったのは，ドソン高校訪問である。参加高校生は，スポーツや給食，ディスカッション等を通して，韓国の高校生との距離をどんどん縮めていっていた。参加高校生の韓国語のスキルはそれぞれ異なっていたが，どの参加高校生も相手が伝えたいことを理解しようと，視線を合わせ，ジェステチャーを交えながら積極的に会話を行っていた。お互いに相手の思いを大切にしようとすることで，さらに自分の考えを深めたり多角的に見つめたりすることにつながっていた。ドソン高校から帰る際には，涙を流し抱き合ってなかなか離れられないほど親密な関係が築き上げられていた。言葉は十分ではなくとも，心と心が通じ合った証だと感じた。

そして何よりも素晴らしいと感じたのは，“自分の力を高めたい，他国について知りたい，他国の人と実際に触れ合いたい”と，この研修に参加した高校生の意欲である。何事も挑戦なしに力をつけることはできない。参加者からは，「もっと語学の勉強がんばらなければ」「帰ったら，将来について，本気で考えよう」という言葉も聞かれた。韓国の高校生や異文化に触れる経験，また同じ日本の高校生の韓国語のスキルや考えに刺激を受ける経験が、現在の自分を真摯に見つめ直すきっかけになったのかもしれない。挑戦した者にしか感じられないものや得られないものがある。それらをこれからも一つずつ積み上げて，柔軟な姿勢と広い視野を身につけながら歩んでいってほしいと願う。

４）リーダー　國定　奈央子（総務企画部企画・評価係）

「新しい世代に期待すること」

「通じた……！」

自分の言葉が、初めて現地の人に通じたときに彼らが見せた表情が強く印象に残っている。最初はなかなか韓国語を発せなかった学生も、日を追うごとに慣れていき、事業４日目の高校訪問では皆が積極的に韓国の学生とコミュニケーションを取っていた。日本語混じりだったり、ジェスチャー頼みだったりと必ずしも流ちょうな韓国語での会話ばかりではなかったようだが、それでも高校訪問を終えた後の学生たちの表情は達成感であふれていた。「韓国の学生と連絡先を交換した」といってメッセージのやりとりを見せてくれた学生もいた。

事業開始直前、日韓関係は戦後最悪の状況と言われ、事業の実施自体も不安に感じるほどの状況であった。しかし、実際に彼らは韓国へ行き、現地の人たちと出会い、たくさんの話をして、友達になって日本へ帰ってきた。

榛接高校の校長先生のお話の中で印象的だった言葉がある。「いま両国は様々な課題を抱えているが、それは私たち大人が解決するべきこと。あなたたちは新しい世代として新しい関係を築いていくことができる。」

この事業に参加した学生たちが、これまでの概念にとらわれず多くの人と関係を築いていくことを期待する。

５）須崎　情惠（子どもゆめ基金部国際・企画課国際企画係）

「交流がもたらす相互理解」

参加者全員が韓国語学習者を前提に選抜された学生である。同時に、韓国のポップカルチャーに関心の高い学生が大多数であった。そのため、様々なプログラムを体験し、韓国の「今」と「昔」に触れ、同世代の学生との交流を通して、韓国の「現状」を知り、韓国を多面的な視点で知ることができた点は意義深いだろう。

日韓の関係悪化の影響で、参加者から不安の声が聞かれたが、それは９月に韓国の高校生を日本に迎えた際も同様であり、「日本に来るまで不安だったけど、良い交流ができて嬉しい」「日本がもっと好きになった！」などの声が聞かれた。日本の参加者も、帰国後は同様の気持ちではないだろうか。不安定な情勢下でも、交流は継続すべきであり、交流そのものの持つ力を切に感じる瞬間であった。

また、毎日のプログラムの中で、韓国語を用いて楽しみながらコミュニケーションできたという声や、自身の語学力を確かめることができ、さらに上達させたいという向上心がうかがえた。さらに、高校訪問プログラムでは、相手との違いを感じることが他者理解につながり、まずは相手を知ることから始めるべきであることを参加者の姿から学ぶことができた。高校訪問で出会った友人や５日間お世話になった大学生のヌナ・オンニ（お姉さん）たち、共に韓国に渡った全国の仲間との縁をこれからも大切にしてほしい。

最後に、韓国での気づきを自分の中に留めたままではなく、自分の目で見て、肌で感じた「韓国」を、周りの友人や家族に発信してほしい。日常に戻った今こそ、ぜひその輪を広げてほしいと願っている。

受 入 事 業 報 告

１．参加者名簿

１）参加者名簿

	氏名	ローマ字表記	学校	地域
1	カン・インクォン	KANG, INGWON	清水高等學校	忠南
2	カン・ハヨン	KANG, HAYOUNG	忠南女子高等學校	大田
3	キム・ボギョン	KIM, BOKYUNG	全州新興高校	全北
4	キム・イェリョン	KIM, YERYEONG	大田外國語高等學校	大田
5	キム・ハンミン	KIM, HANMIN	金泉中央高等學校	慶北
6	キム・ヒョビン	KIM, HYOBIN	빛고을 (光の村)高等学校	光州
7	ミン・ヨンソン	MIN, YEONGSEON	谷城高等學校	全南
8	パク・ナビン	PARK, NABIN	聖南高等學校	世宗
9	パク・イェリム	PARK, YERIM	禿山高等學校	ソウル
10	パク・ジュニョン	PARK, JOONHYEONG	北一高等學校	忠南
11	パク・ヘヒョン	PARK, HAEHYUN	雲南高等學校	光州
12	シン・スンミン	SHIN, SEUNGMIN	大一高校	ソウル
13	ヤン・ジヨン	YANG, JIYEON	山南高等學校	忠北
14	イ・ダヒョン	LEE, DAHYUN	祥明大學校師範大學 附屬女子高等學校	ソウル
15	イ・ミヌク	LEE, MINUK	佳林高等學校	仁川
16	イ・ヨンジュ	YI, YEONJU	中央大學校 師範大學 附屬高等學校	ソウル
17	イ・イェジョン	LEE, YE-JEON	明德女子高等學校	ソウル
18	イ・ジョンミ	LEE, JEONGMI	安溪高等學校	慶北
19	イ・チャンジュン	LEE, CHANGJUN	井邑高等學校	全北
20	イ・ホジュン	LEE, HOJUN	龜尾高等學校	慶北
21	イム・コヌ	LIM, KUNWOO	桃林高等學校	仁川
22	チョン・スヨン	JEON, SUYEON	仁川新峴高等學校	仁川
23	チョン・シムヨン	JUNG, SHIM YEON	順天第一高等學校	全南
24	チョン・ジニョン	JEONG, JINYONG	倉洞高等學校	ソウル
25	チン・ユジョン	JIN, YUJONG	宗村高等學校	世宗
26	ピョ・ジェヨン	PYO, JAE-YOUNG	永登浦高等學校	ソウル
27	ハン・ジヒョン	HAN, JIHYUN	龜巖高等學校	ソウル
28	カン・フィウォン	KANG, HWIWON	木浦高等學校	全南
29	コ・テフン	KO, TAEHOON	中央高等學校	ソウル
30	キム・ドンヒョン	KIM, DONGHYEON	忠南高等學校	大田
31	キム・ミンソ	KIM, MIN SUH	ソウル文化高等學校	ソウル
32	キム・ミヌ	KIM, MIN-WOO	富平高等學校	仁川
33	キム・ジョンヒョン	KIM JEONGHYUN	吉原女子高等學校	慶北
34	パク・ソヌ	PARK,　SEONWOO	清州工業高等學校	忠北

	氏名	ローマ字表記	学校	地域
35	パク・シウ	PARK, SIWOO	世明コンピューター高等學校	ソウル
36	パク・ウンソ	PARK, EUN SEO	洪城高等學校	忠南
37	パク・ハナ	PARK, HANA	金玉女子高等學校	ソウル
38	ソ・チェウン	SEO, CHAEWOON	裡里高等學校	全北
39	ソン・ウォンジョン	SON,WONJUNG	東丘マーケッティング高等學校	ソウル
40	ヤン・ドンファン	YANG, DONGHWAN	又松高等學校	大田
41	ユ・ウンス	YU, EUNSOO	道詵高等學校	ソウル
42	ユク・ヒョンソ	YUK, HYUNSEO	忠南外國語高等學校	忠南
43	ユン・ヘヨン	YOON, HYEYOUNG	淸州中央女子高等學校	忠北
44	イ・ミナ	LEE, MINA	金泉女子高等學校	慶北
45	イ・ソンビン	LEE, SUNGBIN	大昌高等學校	慶北
46	イ・ジョンミン	LEE, JEONGMIN	恩平高等學校	ソウル
47	イ・ジア	LEE, JIA	全南女子高等學校	光州
48	イ・ジヒョン	LEE, JIHYUN	光陽白雲高等學校	全南
49	イ・ヒョナ	LEE, HYUN　A	全北外國語高等學校	全北
50	チョ・ヨンジン	CHO, YOUNGJIN	國際高等學校	光州
51	チェ・ヘジュ	CHOI, HAEJOO	北三高等學校	慶北
52	ヒョン・セウン	HYONG, SEEUN	文井高等學校	ソウル
53	ホン・ギヒョク	HONG, KIHYEOK	青園高等學校	ソウル
54	ファン・テユン	HWANG, TAEYUN	桂陽高等學校	仁川

２）引率者名簿

	氏名	ローマ字表記	学校	地域
団長	イ・ギョンエ	LEE, KYEONG AE	榛接高等學校	京畿
副団長	ハン・ソンヨン	HAN, SUNG YONG	道詵高等學校	ソウル
引率	ユ・チュンギュン	YOO, CHUN GYUN	國立國際教育院	ソウル
引率	イ・ギョンソン	LEE, KYEONGSEON	徳成女子大学校	ソウル
引率	パク・クィジャ	PARK, KUY JA	國立國際教育院	ソウル
引率	イ・ソジョン	LEE, SEOJUNG	國立國際教育院	ソウル

２．日程

	日付	場所	時間	プログラム
1	9 月 17 日 （火）	東京	午後	成田空港到着 開校式 歓迎夕食会
2	9 月 18 日 （水）	東京	午前 午後	訪問：国際連合大学 訪問・体験：日清カップヌードルミュージアム
3	9 月 19 日 （木）	東京	終日 夜	①訪問：関東国際高等学校 ②訪問：東京都立目黒高等学校 見学：東京都庁、東京駅
4	9 月 20 日 （金）	東京	午前 午後 夜	訪問：東京外国語大学 学習成果発表会 歓送交流会
5	9 月 21 日 （土）	東京	午前	成田空港発

３．ダイジェスト

＜９月１８日（水）＞

○訪問「国際連合大学」

国連大学の概要や機能について説明を受けるとともに、SDGｓ（持続可能な開発目標）について、国際社会の中で自分自身ができることについて考える時間となった。さらには、世界の食料事情についても説明があり、世界の人々の命を救うための一歩に何をすべきかを学ぶ時間となった。

○訪問・体験「日清カップヌードルミュージアム」

グローバル企業である日清カップヌードルミュージアムを訪問し、企業理念や世界的に食されている即席麺を開発するまでの想いや歴史について学んだ。ミュージアム内を見学するだけではなく、体験を通して日本の食文化の歴史について接することができた。

＜９月１９日（木）＞

○交流①「関東国際高等学校」

韓国団１団は、関東国際高等学校に訪問し、午前中は国別グループで望ましい高校の条件を発表した。午後は、日韓の混合グループに分かれて、①学校教育の課題、②少子高齢化社会を生きる、③女性の社会進出を考える、などについて、ディスカッションを行い、各グループで出た意見を全体で共有した。

○交流②「東京都立目黒高等学校」

韓国団２団は、目黒高校に訪問し、部活動体験や授業体験を行った後に、日本人高校生と①日本と韓国で興味のあること、②学校生活について、③自分の将来（進路）、などのテーマについて、各グループで自由にディスカッションを行った。その後、各グループの日本人と韓国人の代表が全体に向けて、話し合った内容について共有を行った。

＜９月２０日（金）＞

○訪問「東京外国語大学」

東京外国語大学の概要説明を受けた後に、韓国からの留学生と意見交換を行い、日本での生活や留学後の進路など、韓国団が疑問に思っている点などが話し合われた。その後、留学生による学内キャンパスツアーを行い、留学生の大学生活を見学した。

○学習成果発表会

４日間の研修を通して、日本の高校生との交流や日本に留学している韓国人大学生との意見交換、国連大学での研修などで感じたこと、気づいたことをまとめるとともに、帰国後にどのように生かすかについて、各グループで発表を行った。

４．学習成果発表会

（１）日本の高校生との交流

・両国の関係が悪化していることで、韓国に対する印象が悪いのではないかとの不安があったが、日本の高校生たちは優しく受け入れてくれた。

・部活動体験やディスカッションを通して、Ｋ－ＰＯＰや韓国ドラマに興味を持っている日本人高校生が多いこと、韓国語を話せる高校生が思っていた以上に多かったことが印象的であった。

・日本の高校生は理解しようと努力してくれている印象があり、そのおかげで親しくなれたように感じた。

・ディスカッションを通して、両国の高校生の趣味や興味があることについて話し合い、距離的にも近い国ながらも相違点は多く、学ぶことが多かった。

（２）日本に留学している韓国人大学生との意見交換

・留学に関する情報を持っていなかったが、今回のディスカッションを通じて、現実的な情報や助言を聞くことができ、留学に対するイメージが深まった。

（３）国連大学での研修

・国連大学の存在を知らなかったが、今回の研修を通して、ＳＤＧｓを含め、国連大学で取り組んでいる活動を知ることができた。

・ＳＤＧｓについては、各自の小さな一歩から改善できることを学んだ。

（４）韓国に帰国後にどのように生かすか

・日本の文化を学ぶ際には、自分たちとは異なることを理解することが重要である。

・日本の高校生とのディスカッションを通して、同世代の日本の高校生の興味について知ることができたため、日本の文化についてさらに学びたいと思う。

・高校でのディスカッションを通して、これからの両国の未来（少子高齢化や女性の社会進出など）について話し合ったが、意見を述べただけではなく、自分たち世代が行動に移せるように努力したい。

・国連大学で学んだようなＳＤＧｓに関する取り組みについて、帰国後は意識して取り組んでいきたい。

５．成果と課題

（１）企画について

本事業は、日本と韓国の高校生の相互交流を通じて、友好親善を深めることや国際的な視野と資質を持った青少年の健全育成を図ることを目的としている。韓国の高校生が日本人高校生との交流を行うことや日本の国際機関、グローバル企業の訪問等を行うことで目的を達成するためのプログラムとした。

（２）成果

まず、成果として挙げられるのは、韓国団が日本人高校生と交流の機会を持てたことである。高等学校訪問を通して、部活動体験や授業体験、自分自身の将来やこれからの社会などについてディスカッションを行ったことで、日本と韓国の高校生がお互いの考え方や相違について、知る機会となった。

次に、国際機関である国際連合大学を訪問したことで、国を越えて国際社会にどのように貢献できるかを学ぶきっかけとなったことである。さらに、東京外国語大学に訪問し、日本に留学している学生（韓国人留学生も含む）とディスカッションしたことで国際的な感覚を学ぶこともできた。

最後に、日清カップヌードルミュージアムに訪問したことで、グローバル企業の理念なども学ぶことができた。カップヌードルミュージアムでは、カップヌードル開発者である安藤百福氏の「創造的思考」から開発されたカップヌードル作りを体験し、クリエイティブな発想と諦めない執念で世界の食文化のために貢献したいという理念にふれることで、国際社会のために国を越えてできる一歩の重要性について学ぶことができた。

（３）課題

日本人高校生と活発な意見交換を行うためには、テーマを再考する必要がある。

昨年同様にＳＤＧｓをテーマに意見交換を行う予定であったが、テーマを変更することとなった。専門的に韓国語を学んでいる訳ではない日本人高校生にとって、グループに分かれてＳＤＧｓをテーマに意見交換を行い、意思疎通を図るのは難しいと判断したためである。ＳＤＧｓについて意見交換を行うのであれば、両国の高校生が興味のある話題、例えば日韓の文化の相違点等から意見交換を行い、意見交換の中から出たキーワードが、結果的にＳＤＧｓの項目の一つに落とし込めるようなプログラムの工夫が必要である。活発な意見交換とするには、プログラムに仕掛けが必要であろう。

次年度以降、韓国側担当者とも打ち合わせを行い、韓国団にとって質の高いプログラムとなるよう再考する必要がある。

最後に、今回の企画・運営に際し、多くの方に携わっていただいたことで、韓国団の有意義な研修を展開することができた。プログラムに協力していただいた全ての方に感謝申し上げる。

令和元（2019）年度　　文部科学省委託事業
日韓高校生交流事業　事業報告書

令和２年１月発行

編集発行
◆
独立行政法人　国立青少年教育振興機構　国際・企画課
http://www.niye.go.jp
〒151-0052　東京都渋谷区代々木神園町３－１
TEL　03－6407－7616

本報告書は、文部科学省の青少年国際交流推進事業委託事業として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和元（2019）年度「日韓高校生交流事業」の成果を取りまとめたものです。
従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。